

その桜、雪の如く！

～ラテール 物品保管所に捧ぐ～



著 * Nana Tsu



その桜、雪の如く！

エリアス物品保管所。珍しく、長髪を後ろで束ねた男性——ラフィが店の外に立っていた。支店長のラフィは、物品保管所のシャッターを下ろし、鍵を閉めた。

そこへ冒険者が通りかかって、慌てたように尋ねる。

「あ、あれ？ 閉店するんですか？ まだ、色々預けていたと思うんですけど」

物品保管所は、お金や防具などの物品を、預けたり取り出したりできる場所である。身軽に旅する冒険者にとって、倉庫の役割を担っており、大抵の冒険者は、高価な防具や、多額のお金を預けている。そのため、万が一、物品保管所が潰れ、今まで預けた物を取り出せなくなってしまっただけでは、冒険者にとっては一大事である。

ラフィは、そんな冒険者の心情を組んで、笑顔で丁寧に答える。

「本日の午前七時からメンテナンスです。ご存じの通り、メンテナンスの間は営業できませんので、一時的な休業ですよ。物品保管所は、潰れません」

冒険者は、はっとして時計を見た。七時まであと数分と言ったところだろうか。空は明るく、春の訪れを告げる日差しが眩しい。こうしてはいられないと、冒険者は軽く頭を下げて、どこともなく消え去って行った。

入れ替わるように、建物の裏手から、青髪の気の強そうな女性が現れる。

「ラフィ様、戸締りの確認は済みました。そろそろ行かないと」

彼女の名前はシズ。ラフィと同様、エリアス物品保管所の職員である。

「これを貼ったら、こちらも終わりです」

ラフィは、下ろしたシャッターの上に、一枚の紙を張った。

『休業のお知らせ。期間、本日のメンテナンスの時間帯。職員は花見のため、御用の方は桜木の湖まで』

通常、物品保管所はメンテナンス時、雑務をしている。しかし、今回、メンテナンスの間は休業にして、物品保管所の職員で花見をしようと言うことになっていた。

桜の木がある支店を担当しているユラが、桜が綺麗だと言ったのが始まりだった。それなら、気晴らしに、湖のほとりにある桜の名所に行こうか、という流れになったのだ。

「ユラが言っていた通りね。桜がホント綺麗」

桜の大木の下、シズが桜を見上げた。つられるようにラフィも頭上を見上げる。降り注ぐ花弁は、淡い色で緩やかに弧を描く。まるで、季節外れの雪のようだ。

「ご近所さんだったのに、こんなに桜が見ごろなんて気づきませんでしたよう」

のんびりとした声でキョンが言った。桜木の湖は、キョンの担当する龍京都市と、ユラの担当するアオイチ都市の中間にある。とは言っても、アオイチは黒月姫の城下街で、桜の木の多い都市であるため、龍京とは土地柄が異なる。

「えへへ。お手柄でしょう？」

褒められたユラは、少し得意げな顔で言うと、お弁当をシズとキョンの間に下ろした。イゼット、アンネ、サティがそれぞれ、箸だの器だのを配る。ユラの連れてきた白い子犬が、興味深げにお弁当の匂いを嗅いでいた。

「サンドイッチだよ。イゼットさんが冒険者さんから、トマトいっぱいもらったんだって。だから、アンネさんとサティさんと一緒に、トマトサンドにしてみました」

ユラがそう言ってお弁当の包みを解く。お弁当は三段の重箱で、中には、トマトサンドイッチがぎっしり詰まっていた。

「いっぱいですねえ」

キョンが感嘆とも呆れともつかぬ声で、重箱を覗きこんだ。

「イゼットったら、エルパに来た冒険者に、トマト狩りでも頼んだの？」

シズが重箱を一段ずつにして広げる。どれにもトマトサンドイッチがぎっしり詰まっていて、そのうちの一つに子犬が飛びこみかかって、ユラが子犬を抱き上げる。

「そんなこと……しない。あいつらが勝手に持ってきた」

イゼットが、淡白な口調で答えた。このイゼットの回答を、ラフィがたしなめる。

「あいつら、は聞き捨てなりませんね、イゼット。誰のことですか、お客様のことですか？」

イゼットはどこともなく遠くを見やった。そして、小さな声で、

「……言い間違えた」

呟いて、お客様が持ってきた、と言い直す。イゼットは、会話を面倒くさがっている節がある。良く言えば自分に素直なタイプなのだが、言葉遣いに無頓着なところがある。ただ、その無頓着な所に人気もあり、イゼットには隠れファンがいるらしい。もしかしたら、トマトも、そのファンの一人からのプレゼントなのだろう。

「さて、サンドイッチが桜に埋もれる前に、いただきます」

シズは花びらに隠されつつあるサンドイッチを手を取った。それに各々が続いて、桜木の湖のほとりで、小さな花見となった。

アンネがサンドイッチを手に取り、桜の木の根元に腰を下ろす。

「久しぶりに、こんなに遠出したわ」

そう言うアンネの隣で、サティが微笑む。

「ふふ、ベロスからじゃ遠いわね。アンネは、学業には秀でているのに、体力が無くっていけないわ。昔からそう」

「昔、と言えば。桜の咲く頃に卒業試験やったわね。懐かしい」

アンネの故郷はエリアス都市で、サティとは、その時代からの付き合いである。同じ学校を卒業し、同じ物品保管所の職員になった。とは言ってもアンネの担当するベロス都市と、サティの担当するベス都市は、端と端で滅多に会うことはない。ベロス都市とベス都市は一字の差なれど、その物理的な距離は遠い。

「アンネさんとサティさん、何のお話しているんですか～？」

アンネとサティの前に、ユラが子犬を抱いてひょっこりと現れる。白い子犬の口元からは、トマトの端っこが覗いていた。二人の目線に気付いて、ユラがちょっと困った風に苦笑した。

「形が変だった不思議なサンドイッチ、シロにあげちゃいました。私が作ったやつなんですけど」

「この子の名前、シロって言うの？」

そう言って、シズが、ユラの抱いている子犬の頭を撫でた。会話が聞こえた様だ。

「白くてふわふわだから、シロなんですよ」

ユラが得意そうに説明する。

「可愛い由来ですねえ。抱いてみたいです」

ふわふわというイントネーションに惹かれたのか、キョンが、子犬のシロを見つめた。ユラが快諾して、シロをキョンに渡す。

「シロさん、確かにふわふわですう」

キョンは、慣れない動作でシロを抱くと、その毛並みを堪能した。

「シロの親の名前が、マロって言うんですけど。私、たまにシロのことマロって呼んじゃうんですよ」

「親はこの子と似てるの？」

シズがシロを撫でながら尋ねる。

「見た目が似ていますね。ただ性格はまるっきり違いますよ～。マロは物を隠すのが好きで、シロはマロが隠した物とかを見つけてくるのが好きみたいです」

このシロの特性を聞いて、シズが良いことを思いついたと発言する。

「あら。じゃあ、ラフィ様の財布を見つけてくれたりしないかしら。ラフィ様ったら、この前も落としたりらしいの」

この言葉には、その場に居た全員が笑った。と、一斉の笑い声に驚いたのか、シロがぱっと動いた。キョンの腕の中から脱出したシロは、たたっ、と軽快に走り、行ったり来たりして、ある桜の木の根元で止まると、おもむろに穴を掘り始めた。

「シロったら。汚れちゃうじゃない」

そう言って、ユラがシロを抱き上げる。そして、シロが掘った穴を見て、

「あ、あれ？ これ箱じゃないですか？」

驚きの声を上げた。

桜の木の根元。その地中から出てきたのは、紫の箱だった。色あせた感じからは年代を感じるものの、その場に居た全員にとって、とても親しみのある形をしていた。

「物品保管所の箱みたいですね」

シズが言う。形状も大きさも、物品保管所で物品を入れるために使用している箱に似ている。唯一違うとすれば、その色くらいだ。物品保管所の箱の色は緑だ。

ラフィが、紫の箱を手にとって、フタを開けた。中には、桜色の房の付いた銀鈴がひとつ入っているだけだった。ふむ、と呟いて、箱を細かく確認する。

「これは……、物品保管所の箱ですね」

「まさか、預かり忘れですか」

ユラが不安そうに言った。物品を預かっていて、桜の根元に置き忘れていた、なんてことだったら、物品保管所の信用にかかわる。

「しかし、使用している箱と、色が違いますよ？」

アンネが問う。緑の箱は、色あせたとしても紫にはならない。これには、ラフィが一呼吸置いて答える。

「現在は、グリーンウォーキーという緑トカゲの皮で箱を作っています。しかし、昔はパープルウォーキーという、紫トカゲの皮で箱を作っていたそうです。乱獲のためパープルウォーキーの数が減少してしたことから、グリーンウォーキーに移行したと聞いています。現在、パープルウォーキーがどこに生息しているのか、はたまた絶滅してしまったのかは知られていません。ですから、この紫の箱は最近作られたものではないでしょう」

ラフィは、指先で眼鏡を直した。箱の色を確かめるように、表面の土を丁寧に払う。

「私も、黒月姫の城や隼の城から物品を預かる時くらいしか、紫の箱を見たことがありませんね。いまだにこの色を使用しているのは、歴史ある付き合いの所だけです」

それほど古い物です、とラフィは締めくくった。物品保管所の預かりの記録の中では、紛失した物はない。それは物品保管所の職員の誇りであり、物品保管所が厚い信頼を得ている所以でもある。

もしかしたら、この房の付いた銀鈴を入れるために、物品保管所の箱を使っただけで、箱は預けられることなく、桜の木の下に埋められたのかもしれない。しかし、昔の記録に不備がないとも限らない。

「この箱に入って、出てきてしまった以上、預かるしかありませんね」

ラフィはきっぱりと言った。

関係ない箱なら、例えば、木の箱なら、そのまま桜の木の下に戻したかもしれない。埋めた人の思いが何かあるのだろうと、そっとしただろう。しかし、物品保管所の箱が使われている以上、ラフィ達も無関係ではない。これがもし、預かり品だった場合は、物品保管所の信頼、ひいては存続に関わる大事件になってしまう。

ラフィは思わず嘆息した。気晴らしの花見のはずが、とんだ物品を預かる事態となってしまった。

物品保管所の過去の記録を、調べることから始めた。受け渡しの中に銀鈴と言う品名があるか、職員それぞれが、担当している都市の記録を洗う。

ラフィがその作業をしている最中、黒月姫の城からの使者が来店した。

黒月姫の城は、忍者が守る城である。使者も忍者に所縁のある者なのか、顔の大部分を布で隠していた。

「今年も例の物を預かっていただきたく参上いたしました」

使者はラフィに深く頭を下げて、そう告げた。それだけで、ラフィは、使者が何を持ってきたのかを把握する。毎年、同じ時期に、この使者はやってくるのだ。

「その季節になりましたか。分かりました、預かりましょう」

了解の返答をすれば、使者は持参した漆黒の風呂敷包みを解く。漆黒の布の中から現れたのは、美しい紫の箱だった。古くから変わらぬ色合いだが、長い歴史を感じさせる箱だ。

「分かっていると思いますが、これは外に漏らしてはならぬ大切なものです。どうか、どうか嚴重にお預かりください」

この箱の中身の重要さに比例しているように、使者は深く頭を下げた。

「はい。必ず」

ラフィは、短い言葉で返して、漆黒の風呂敷ごと品物を預かった。使者が店を去った頃、ラフィの所にシズが来た。

「ラフィ様よろしいですか？ 先ほどトニオさんに聞いた話なのですが」

シズがそう切り出した。トニオと言え、冒険者相手にあくどい稼ぎをしている商人だ。そのせいか、人の出入りが激しく情報に通じており、物知りだと言われている。

シズは、その情報網を頼って、トニオに、銀鈴について尋ねてみたと言う。そこで、ある男女の話聞いたのだそうだ。二人は相思相愛だったが、男性は任務のため女性と別れなければならなかった。女性は嫌がったが、男性は重要な任務だと言い、事実上、女性を捨てたのだと言う。捨てられた女性は嘆いて、桜木の湖に身を投げたのだそうだ。話によれば、二人はお守りとして、揃いの房のついた銀鈴を持っていたそうだ、というところで、トニオから聞いた話は終わっていた。

「悲恋ですね」

シズが息を吐いた。そして続けた。

「女性は、身を投げる前に、男性と揃いで身に着けていた銀鈴を、あの場所に埋めたんじゃないでしょうか」

悲しみと捨てられた怨みを、あの箱に閉じ込めたのかもしれない。

「そうかもしれませんが。しかし、念のため記録の確認はします。ただ・・・何もなければ、あの銀鈴は元の所に戻すべきでしょう」

おそらく記録は何もないだろう。ほぼそう確信して、ラフィは安堵と悲恋のやりきれなさを思っていた。

これで銀鈴の件は終わりだ、シズはそう思って、ふと漆黒の風呂敷に目を止めた。

「そういえば、先ほど来店されたのは、黒月姫の城の使者ですね。ラフィ様、何かお預かりになったのですか？」

シズの視線に気づいて、ラフィは、漆黒の風呂敷を解いて、色鮮やか紫の箱を見せる。あの色あせた紫の箱も、以前は、このように鮮やかな色だったのだろう。そのような思いに駆られながら、色鮮やかな紫の箱を開く。

「毎年行われる、例の物ですよ。黒月姫の城に居る忍者の、卒業試験の問題用紙です」

文字の書かれた大量の紙が、そこにあった。おそらく、忍者候補生が忍者になれるかどうかが決まる、年に一度の重要な試験の問題用紙である。試験を受ける者なら、喉から手が出るくらい欲しい問題用紙だろう。なにせこの合否で忍者の運命が決まるのだ。

ラフィはそんな重要な物品を、漆黒の風呂敷に包んで、大切に奥の棚にしまった。

その夜、ラフィは夢を見た。

満開の桜がはらはら散る。その下に足のない女性が居た。最初は穏やかな黒髪だった。しかし、次第に怨念をはらんで髪は白く染り、女性は、恨めしい、と言った。

雪のように桜が散る。女性が再び口を開く。死の国へ連れて行ってしまいたい、と言ったように聞こえた。

続いて、しゃん、と銀鈴の音がした。女性は、音のする方を向いた。

その音は、暗闇の奥から聞こえた。女性は音に導かれるように、暗闇の奥へ消えて行った。女性の興味が、銀鈴の音に移ったようだった。それが夢の終わりだった。

ラフィが夢を見ているのと同じ時刻。真夜中、エリアス物品保管所の中。

落第予備軍という者はどこにでも居る。もちろん忍者候補生の中にも。

「おい、忍者の卒業試験問題がここにあるって言うのは本当か？」

暗闇で声がした。暗闇の中に、黒装束の忍者が四人居た。正確には忍者候補生だ。

「ああ。紫の箱に入っているっていう情報だ」

「お、これじゃないか？ 紫の箱だ」

一人の忍者候補生が、紫の箱を手を取った。それは、色あせた紫の箱だったが、暗闇に居る彼らはそんな色の違い、分かるはずもない。そもそも、彼らの目的である紫の箱は、漆黒の風呂敷で包まれて、暗闇にしっかりと溶け込んでいるのだ。

「間違いない。これで、卒業できるぞ！」

箱を手を持った忍者候補生は、その軽さを不審に思ったが、フタを開けて確かめている暇はなかった。物品保管所から脱出する時、箱が揺れて、しゃん、と銀鈴の音が鳴った。忍者候補生が夜道を走り抜ける間、銀鈴は、しゃんしゃん、と鳴り続けた。

そして、彼らはまったく見知らぬ所に立っていた。気付いた時には、もう遅い。

そこは、満開の桜が舞い散る湖のほとりだった。桜の木の下には、女性が居た。

「まったく・・・セキュリティの強化が急務ですね」

ラフィは、割れたドアのガラスを見て、ため息をついた。シズは散らばっていた破片を片付け終わると、床に落ちているクナイを拾い上げた。クナイは忍者の使う武器で、おそらくドアのガラスを割るのに使ったと思われる。十中八九、問題用紙を狙った者の犯行だと思われる。使用した武器を、現場に忘れてしまうあたりが、プロではなく候補生という感じである。

「黒月姫の城には報告してきました。問題用紙を盗もうとした者を追跡するため、上級忍者が派遣されるそうです。問題用紙は無事、というのが不幸中の幸いですね」

ラフィはそう言って、再びため息をついた。

「ただ、間違われたのか、あの銀鈴は持ち出されてしまいました」

シズは、色あせた紫の箱が収まっていた棚を見る。

「ラフィ様。職員全員から、あの銀鈴の記録はないという結果を受けています。つまり、あの銀鈴は物品保管所が預かっていた物ではない、ということです。盗まれたのが預かり品でなかったことは、良かったですね。ただ、なんというか」

落ち着かない、それはラフィとシズに共通する感情だった。桜の木の下から拾った物ではあったが、棚に収めた品を、許可なく持ち去られるというのは、良い気がしない。

それに、ラフィは昨夜の夢のことも気になっていた。悲恋の話聞いた影響で見たただの夢かもしれないが、それにしても、女性の姿が詳細だったし、死の国へ連れて行ってしまいたい、という台詞も気になった。

ラフィは鍵の束を手にとった。

「今日は、エリアス都市の物品保管所は休業にします。ドアがこんな状態では、お客様も安心して物品を預けることはできません」

ラフィはきっぱりと言って、手にした鍵で、ドアや窓などを施錠する。そして、シズに向かって、

「施錠が終わったら、ここを休業にして、私たちも銀鈴を取り返しに行きませんか」

提案した。物品保管所の職員であれば、一度、受け取った物品を奪われたら、取り返しに行かなくてどうする。

「はい、ラフィ様」

笑顔でシズが答えた。

ラフィとシズがその場に着了いた時、桜は吹雪のように舞っていた。舞う桜の間から、黒装束の忍者たちが見えた。桜の木の下に、足のない黒髪の女性が立っていた。忍者候補生は湖に足を入れており、ゆっくりとした動作で、湖の底へと歩みを進めていた。候補生の一人が、手に銀鈴を持っており、彼が動くたびに、しゃん、と音が鳴った。

「やはり、こんなことになっているんじゃないかと思って来てみて正解でしたね」

ラフィが言う。女性を中心に強い風が吹いているらしく、近づくのは容易ではない。

「私は少し怖いですが、ラフィ様。黒月姫の城から派遣される上級忍者を、お待ちした方が良いのでは？」

強風で自分の声が流されてしまう中、シズはラフィに向かって声を張り上げた。

「待っていたら、彼らは死んでしまうかもしれない」

ラフィの言う、彼ら、が忍者候補生のことだとは分かった。湖に足を踏み入れており、着実に湖の深い場所へと歩みを進めている。動きはゆっくりだと言っても、頼みの上級忍者がいつ到着するか分からない今、最悪の場合を想定して動くべきだ。

ただ、シズはそれを実行に移す気持ちに揺らぎがあった。止めに行く場合、ラフィと自分に危険が及ぶ可能性が高い。どう考えても、幽霊の取りついた銀鈴を取り返すことより、盗みを働いた忍者候補生を救うことより、自分の身を守る方が重要な気がする。

何より、シズは、ラフィを危険な目に合わせたくなかった。それは物品保管所の職員として支

店長を守らなければならないという使命感と、それとは別な個人的な感情が混ざった感情だった。

「派遣される方の到着を待つべきです」

シズが強い口調で諭す。ラフィが困った顔をした。それから、苦笑して、

「シズは来ないでください。貴方は女性です。もしかしたら彼女を刺激してしまうかもしれません。私は、とりあえず、彼女と話をして時間を稼いでみます」

ラフィは、シズの頭にぽんと手を乗せた。シズは驚いて、一瞬思考が固まってしまった。

そして、その隙に、ラフィはシズを置いて、桜の木の下に立つ幽霊の元へ向かってしまった。

「知っているかもしれませんが」

ラフィは幽霊相手に、まず、そう切り出した。

「今、湖に沈めようとなさっている方の中に、貴方の恋人はいませんよ」

ラフィがそう言うと、幽霊がラフィの方を向いた。黒髪先端が白く染まっている。怨念を刺激したかもしれない、とラフィは頭の片隅で思った。しかし、忍者候補生が湖へ向かう歩みは止まらない。すでに胸元まで水に浸かっていた。

「それとも、男性全てが憎いんでしょうか？」

ラフィは続ける。幽霊の目が細くなった気がした。肯定、と取れた。

「でしたら、私も男性です。髪は長いですが」

さあっ、と黒髪が白く染まった。怨念に染まった瞳がラフィを捉えた。ラフィは、視野の片隅で、忍者候補生の歩みが止まるのを見た。次の瞬間、ラフィの目の前が桜色で染まった。

桜の花卉を含んだ風が、カマイタチのような疾風となって襲って来たのだ。銀鈴が、長年根元に埋まっていたせいか、桜も怨念の一部と化したようだった。

「こんなことなら、槍でも一本持ってきておくべきでした」

一人後悔を述べて、擦れ擦れで、カマイタチをかわす。身をひるがえし、湖に背を向け、次の攻撃に備えようとした時、ラフィは背中に衝撃を感じた。

振り返れば、操られていた忍者候補生の一人が、いつの間にかクナイを手にし、ラフィの左肩に突き刺していた。身を引けば、忍者候補生がクナイを手放した。そういえば、この忍者候補生たちは、物品保管所でもクナイを置いて行ったな、なんてくだらないことが脳裏をよぎる。

目の前には怨念に満ちた幽霊、背後には動きが鈍いものの武闘の訓練を積んだ忍者候補生。ラフィは自分で左肩のクナイを抜きとると、手近な布紐で止血する。流石に分が悪い、と感じたその時。

「忍者候補生を引き渡してもらおうか」

桜木の上に、白い衣に身を包んだ忍者が現れた。やっと、黒月姫の城から派遣された上級忍者が到着したのだった。白忍者は、忍者候補生と幽霊とラフィの姿を捉えると、

「ふむ。奇妙な組み合わせだな」

呟いた。声が届いたのか、幽霊は白忍者に目を向けた。幽霊は、もう敵が一人増えたという認識しかなく、無言で桜の花卉を含んだカマイタチを放った。白忍者は、突然の攻撃に驚きなが

らも、ひらりとかわす。かわしながら、幽霊に向けてクナイを放った。しかし、クナイは実態のない幽霊の体を通り抜ける。白忍者は眉をひそめた。

幽霊が白忍者に意識を向けている間に、ラフィは、忍者候補生を相手にしていた。あわよくば、忍者候補生の手をしている銀鈴を奪い取ろうという算段だが、武器は先ほどまで自分の左肩に刺さっていたクナイ一本。それだけで、四人も同時に相手していれば、避けるので精いっぱい。——と、そこまで考えて、忍者候補生の振り下ろしたクナイを受け止めた時、銀鈴の音が鳴った。相手のもう一方の手に銀鈴が握られているのを、確認して、ラフィは思わず、銀鈴に手を伸ばして引き抜いた。

幽霊がびくりとして、銀鈴の方を見た。白忍者が不審に思って、幽霊の視線の先を追う。その先に、ラフィの手にした銀鈴があるのを見て、白忍者は絶句した。

桜色の房のついた銀鈴。

白忍者は自分の装備しているクナイの一本に触れた。しゃん、という音がして、クナイに付いた房と銀鈴に触れた。その銀鈴は、随分昔に別れた女性と揃いのお守りだった。房の色は、女性の名前にちなんだものだった。白忍者は、幽霊の正体に思い至った。

ラフィに襲いかかる幽霊の背後に、白忍者が立つ。

「憎いのは、忍者の男ではないのか？」

白忍者が言えば、幽霊が振り返った。白忍者の予想が確信に変わる。予想はしていたものの、見知った女性の顔を見れば僅かに動揺した。瞬間、その女性が放った風に半身が巻き込まれた。効き腕はかばったものの、かばい切れなかった左半身に深い切り傷を負う。

攻撃は問いに対する肯定の答えに思えた。視界の端にラフィの手にした銀鈴が見えた。ラフィが白忍者に向かって叫ぶ。

「この銀鈴が、幽霊の怨みの元です。これを破壊してください」

ラフィの台詞を聞いて、白忍者が呟いた。

「サクラ、俺を怨んで死んだのか」

それは昔の話だ。好きな女性が居て、おそらく相手も自分のことを好いてくれていた。揃いの銀鈴をお守りにして持った。彼女がサクラという名前だから、桜色の房にした。しかし、忍者に任命された時、サクラと別れなければならなくなった。忍者という任務は、孤独でなければならなかった。別れを告げたのは、別な人を探してほしいと言う意味だったが、伝わらなかったのだろう。

サクラが湖で果てたニュースを、城に居る忍者が知る由もなかった。生きて別な人と一緒になっているのかと思っていた。しかし、それは白忍者の一方的な想像でしかなかった。

幽霊が止めとばかりに、深手を負った白忍者を吹き飛ばした。白忍者の体は紙のように、吹っ飛び、湖の上に投げ出される。

吹き飛ばされる僅かな間、白忍者は残った効き腕で、銀鈴めがけて一本のクナイを放った。クナイは一直線に、ラフィの手元まで飛び、銀鈴を貫いて、桜の木に突き刺さった。

あんな銀鈴に囚われず、別な人と一緒に生きてくれれば、良かったのに。湖に沈む瞬間、白忍

者はそう思った。

白忍者が湖に投げ出され、沈んだ。左半身に深手を負ったまま、水面に上がってこられるとは思えない。幽霊は勝ったはずだった。

しかし、一本のクナイが銀鈴を破壊した。怨念のこもった銀鈴は見事に破壊されてしまった。幽霊には、銀鈴と共に、込めた怨念が壊れて行くのが分かった。深い憎しみが壊れて行くのを感じる最中、幽霊はそれを見つけた。

桜の木。突き刺さったクナイに、桜色の房の付いた銀鈴が付いていた。まさか、そんな、馬鹿な。死の国へ連れて行きたいと、思っていた感情はもう壊れてしまったのだ。憎しみが壊れて行く今、その感情に何と言う名前をつければいいのか。自分と別れて居ながら、まだ銀鈴を持っていた相手に、どんな感情を持てばいいのか。

「雪輝丸様」

幽霊の口が、昔に別れた相手の名前を呼んだ。それは、ずっと恋い焦がれた相手を、自分が殺めてしまったと言う、後悔の音を孕んでいた。少なくとも、ラフィにはそう聞こえた。

銀鈴が破壊された瞬間、忍者候補生に意識が戻った。なぜか顔や体のあちこちが痛かったり、なぜか覚えていない打撲や擦過傷があったり、なぜか湖に足を踏み入っていたりしている自分たちに戸惑っていると、少し先の水面に気泡が上がるのが見えた。

陸を見れば、物品保管所の職員がこちらを見ていた。それで、徐々に、幽霊に惑わされたことや、物品保管所の職員が追ってきたことを思い出す。そう、そういえば、自分たちを捕縛しに、上級忍者が現れた気がする、ならば逃げなければならない、そう思った瞬間。

気泡の上がっていた場所から、白忍者が飛び出した。忍者のはしくれならば、その動作だけで、白忍者が上級忍者であることが見て取れた。深手を負っているらしく、白忍者は上手く着地出来ずに、陸の上に倒れ込んだ。水中から脱出するだけで一苦労だったに違いない。運がいい、このまま逃げてしまおう、と忍者候補生が思った瞬間。

「雪輝丸様、ご無事だったんですね！」

幽霊が、白忍者の名前を呼んだ。その名前に、忍者候補生たちは瞠目した。忍者の中で、雪輝丸を知らぬ者はいない。暗殺においては抜きんてた能力を持つと言う忍者だ。

「やらなければ、やられるかもしれない」

忍者候補生たちは、相手を倒すのには、深手を負っている今が好機と見た。

ラフィは、陸の上に倒れ込んだ雪輝丸に、駆け寄った。その時、今まで操っていた忍者候補生が、一斉に雪輝丸に白刃を向けたのが見えた。

「皆さん、気が付いた途端に血気盛んですね。本当に。槍の一本でも持ってくるんです」

ラフィは、小さく舌打ちをする。

ざあっと桜が吹雪のように舞った。桜が視界を埋め尽くし、そして、散ると、ラフィの手元には一本の槍が握られていた。桜の木を象った槍だ。銀鈴を破壊された幽霊の、最後の技かもしれない。怨念桜のソウルスピア。

ラフィは、走りながら、くるりと槍を一回転させて持ち直す。

「昔取った杵柄も役立つ場面があるものですね。ウォーロードから物品保管所の職員に転職したのは、何年前だったか」

ラフィは、慣れた手つきで槍を持つと、雪輝丸と忍者候補生たちの間に分け入り、白刃を受け止めた。そして、軽々とジャンプし、

「百花繚乱」

着地と共に、忍者候補生めがけて、多数の槍を地面から召喚した。もちろん、死なない程度に手加減して。槍によって桜が舞い上げられ、百花繚乱の名にふさわしく乱舞した。忍者候補生たちの体が崩れる。

瞬間、忍者候補生の一人が、

「昔はよかった」

と言った。こんなことなら、昔みたいに、カンニングにしておけば良かった、と言った気がした。

幽霊が雪輝丸の傍に寄った。

「サクラ。俺を怨んでいるか？」

幽霊の姿を見つけると、雪輝丸は息絶え絶えに尋ねた。

「いいえ。怨みは、もうありません。銀鈴と共に消えました」

「そうか、よかった」

雪輝丸のその言葉を聞いて、幽霊は静かに消えて行った。この幽霊の深い悲しみや怨念が、これで癒されたかは分からないが、消える瞬間は微笑んでいたようにも見えた。

問題用紙を盗んだ忍者候補生は、言うまでもなく落第した。噂によれば、その落第忍者たちは、桜木の湖をうろついているという。

雪輝丸の持っていた銀鈴は、壊れた銀鈴と共に、桜の木の根元に埋めた。銀鈴に会いに来るのか、桜木の湖では、散る桜の花弁に重なって、たまに幽霊の姿が見えることがあると言う。

「ラフィ様、今回は散々でしたね」

シズが物品の確認作業をしながら言った。ラフィはクナイを受けた左肩を押さえた。動けないというほどではないが、痛みはまだ残っている。

「本当に。シズに怪我がなくて幸いでした」

ラフィが言えば、シズが顔をそらした。照れたのを隠すためか、早口に話題をそらす。

「そう言えばこの前。隼の城の方に、新顔の白忍者を見掛けたという話を、お客様から聞きま

した。強いのだそうですよ」

「それは、あの時の白忍者かもしれませんね」

ラフィは、散る桜を思い浮かべて、そう答えた。

雪輝丸の名前に由来するように、雪の如く散る桜を思い浮かべて、そう言った。

完

その桜、雪の如く！

<http://p.booklog.jp/book/25835>

著者：72gusa

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/72gusa/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25835>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25835>